

他者と隣り合う場としてのカフェ

—その場に居ることから見えてくるものをたよりに—

日下部 亨介

1. 問題と目的

1-1. はじめに

移動を中心とした日々の生活の中で、ついついカフェに立ち寄るといふことがあるだろう。実際にカフェに入り、周囲を見渡すと、多くの人がその場で自分と同じように過ごしていることに気づく。

本研究の主眼は、雑多な人に溢れるチェーン店のカフェである。チェーン店のカフェの中で顔も知らない人と会話をするのもなく、ただ隣り合っているという状況に不思議さはないだろうか。

都市の中のありふれた場所となったカフェは、つまるところどのような場所なのだろうか。カフェでの当たり前の経験を丁寧に解きほぐしていくことで、都市の中でのカフェの意味というものが見えてくる。

1-2. 先行研究

都市の中でのカフェの意味を考えると、一つの明快な答えを提示してくれる研究がある。オルデンバーグ(1999)は、郊外化によって人間関係が希薄になったアメリカ社会において、顔見知りと楽しく会話ができる関係性を許容する場所に意義を見出し、家でもなく職場でもないサードプレイスの重要性を再提示した。そして、サードプレイスの一例としてカフェを挙げた。

日本のカフェ研究では、サードプレイスという概念は個人経営のカフェと結びつけられやすい。井川ら(2005)は、サードプレイスを尺度のように用い、個人経営のカフェを評価している。しかし、その場で自分がサードプレイスとしての経験をするとなしに、最初から既存の意味を与えて良いのだろうか。また、谷川ら(2008)は、既存の概念を使わずに、店主と顧客への聞き取り調査からカフェの役割を明らかにしているが、さしあたり何の疑問も持たずその場に居る人に対してその場の意味を問うのではなく、問題意識を持った研究者自身の経験から話されるべきではないか。

研究の対象を広げると、私たちは個人経営のカフェだけではなく、チェーン店のカフェを頻繁に利用していることに思い当たる。斉藤ら(2003)は、チェーン店のカフェを経済効果の観点から評価し、チェーン店の

カフェは都市再生に貢献するとしている。

1-3. 本研究の視点

日本のカフェ研究に対して、カフェの意味を問うための方法論に疑問を残しつつも、個人経営のカフェがサードプレイスと関連づけられて議論されるのは納得ができる。「他者とコミュニケーションができる」ということには意味が見出しやすく説得力を持たせやすい。

一方で、「他者との明確なやり取り」が起こっていないチェーン店のカフェは都市の中で意味を持たない場所なのだろうか。この点、本研究は、むしろそのような場であるからこそ積極的に見出せる意味があると考えられる。チェーン店のカフェには経済効果の観点には留まらない意味がある。そして、この視点は、カフェに居るといふ素朴な経験からもたらされたものであり、先行研究の方法論とは異なる場の理解を可能にする。

1-4. 目的

福岡市のチェーン店のカフェでの自分自身も含めた人々のあり方を記述することで、カフェが都市の中でどのような意味を持つ場所であるかということ明らかにする。さらに、サードプレイスに近いと思われるカフェでの筆者の経験を述べ、都市の中でのチェーン店のカフェの意味を浮き出させる。

2. 方法

2-1. 現象学的態度

カフェを明らかにすることは如何にして可能か。阪本(2008)は、場所への問いは現象学的な問いであるとし、現象学に関して、「主観」が意図しないにもかかわらず、異なった見方をしようと試みるにもかかわらず、「そう見えてしまう」といふように知覚されると述べる。場所で現象学するという事は、その場所で必然的に問うに至った現象、目で見て確認しにくいとその場で確かに感じる手応えを、その場での経験を積み重ねる中で言葉にしていく、見えるようにしていく作業であると理解できる。つまり、都市の中に当たり前に存在するカフェとはどのような場かということ明らかにすることは、その場に居る中で何がどのように見えているのかということ記述することである。

2-2. 「その場に客として居る」という方法

カフェを記述するとは、店内の全ての客の一挙一動を天井からビデオカメラで撮るように記述することではない。また、店内の構造やデザイン等の寄せ集めとしてカフェは目の前に広がっているわけではない。

この点、鈴木(1994)の「居方」、つまり、人がある場所に居る様子やそこに生じている周囲との関係性が、まるごとその場所の都市としての豊かさを現しているという指摘は重要である。しかし、自分とは離れた場所にある「シーン」として見ているということに留まっているため、その場の豊かさを語りきれていない。自分自身がその場にそのように居るからこそ、鈴木という言葉の借りれば「その場の質の豊かさ」を語ることができるのである。すなわち、鈴木の研究を引合いに出し本研究の方法論を強調すると次のようになる。

カフェという場は、時には見過ごされるものとして、見たくても見ることのできないものとして目の前に広がり、時には周囲など構ってられないほど自身の作業に没頭する場としてある。一方で、見聞きした範囲で記録する作業を許容する場でもある。

つまり、記録に残すことができた／できなかったという自身も含めた人々のあり方をまるごとを提示し考察することで、カフェという場を明らかにすることができると考える。自分自身もその場に居るということの意味を積極的に取り扱うということである。まさにその場に居る者として自身に差し迫ってきたこと、感じたことまで含めて方法とするということである。

2-3. フィールド

問題と目的、方法の妥当性に照らし合わせて、本研究のフィールドとなるカフェは筆者の普段の生活の中で自然と立ち寄るチェーン店のカフェとなる。

2-4. 記述の提示

筆者の「カフェでの経験まるごと」の中から、カフェという場をよく現す現象を拾い上げて考察する。そのため、例示するというかたちで記述を提示していく。

3. 結果と考察

3-1. 見知らぬ他者

本章の一節で、チェーン店のカフェの中では「見知らぬ他者」の存在が浮かび上がってくるという論が展開される。それを受けて、「見知らぬ他者」と自分との間で何が起きているのかという点について踏み込んで言及するのが二節となる。三節では、まとめとして、「見知らぬ他者」と「隣り合う」ということ自体に、

その場の意味が含蓄されているという論が展開される。

記述1：2010. 11. 10 16:31～18:37

スターバックス ホテルセントラザ博多店

今、目の前にカップルがやって来てテーブル席に座る。カップルが座ろうとしているテーブル席の右隣にはもともとギャル風の女性が座っていた。ギャルは自分の左側の椅子（ソファ）の上に荷物を置いていた。カップルの女の方がギャルの隣に座ろうとする。特に邪魔になっていたというわけではないが、ギャルは反射的に椅子の上の荷物を自分の方にさっと引き寄せた。それに対してカップルの女は「すみません」と小声で言い、軽く頭を下げる。

「荷物を動かす」というふるまいが見られる。動かす方もその受け手もお互いに特別なことはしていない。さりげないが故に関心を払っているようには見えない。記述のギャルのように反射的に身体が動くということだけのことかもしれない。しかし、他者のことが視野に入っていないわけでもない。人が人の隣に座ろうとする瞬間には、関心という言葉では言い表すことができないくらいのさりげないふるまいが見られる。

記述2：2012. 8. 30 12時半～13時半

スターバックス 天神地下街店

ボーダーのTシャツに赤いスカートの女性。目についたのは、彼女が正面を向きぼーっとしていたからだ。私の目の前で忙しくクッキーのくずを払ったりスマートフォンをいじったり本を読んだりしている男性とは対照的だったので目にとまった。彼女を見ていると10秒も経たない内に目が合ってしまった。私は何事もなかったかのように目を逸らす。彼女も目を逸らした。彼女もまた本を読む合間に見るともなく周囲を眺めていたのだろう。

「ぼんやり眺める、目が合い、目を逸らす」ということが起こる。目が合うということが起こったとき、筆者もそして筆者と目が合った人も、何事もなかったかのように目を逸らしその瞬間をしのぐ。目が合ったからといって会釈するでもなく微笑むでもない。無表情のまま目を伏せたり視線を別の方向に向けたりする。人々は互いに関係し合っていないように見えながらも、視線のレベルで交錯し合っている。しかし、人々はその瞬間にある人のことを捉えてしまったということとその瞬間限りのこととし、またはそのような出来事はなかったことにさえしてその場で過ごしている。このような視線の技術を人々は自然とやってのけてみせる。

また、カフェの中では他の客の会話が「聞こえている」。自然と聞こえてくる、積極的に聞こうとする、いずれの場合でも、聞きやすいように近づいていったり、つい頷いてしまったり表情を変えたりはしない。会話の方には目もくれず、「聞いている」ということを悟られないようにふるまっている。他人の会話は他人の会話、自分の作業は自分の作業ということ、聞きながらも平然とやってのけている。これらのふるまいは、カフェが「見知らぬ他者とその場限りのこととして隣り合わせている場」であるということ物語っている。

3-2. 見知らぬ他者とのあり方

記述3：2012.11.10 16時半～17時半
スターバックス ハッチェリー天神店
私の左隣の席にも女性2人組が座っている。彼女たちは私が席に座りこれら一連の出来事を記録している間も黙々と作業をしている。…ふたりはびったりと身体をくっつけるようにして座り各々の作業をテーブルに伏せるような姿勢で行なっている。…私に近い方の女性が使っているテキストの背表紙がたまたま見える。背表紙には『ANA 客室乗務員になるための…』と書かれている。…私の右隣にカップルが座る。…私は右側イスの上に置いていた自分の荷物をまだスペースの残っている左手反対側に移動させる。カップルがふたりで座るには狭すぎるのではないかと、自分と距離が近くなりすぎて気まずいやり取りになるのではないかと思ったからだ。先程の客室乗務員の勉強をしていた女性の荷物の隣に自分の荷物を置く。黒い生地にも銀色で“CECIL McBEE”というロゴがはいっているのが目に入る。

前節で例示したように、人々はある瞬間には他者の存在に揺さぶられながらも平然とその場をやり過ごしている。このように、様々なふるまいを通して自分と他者の間で「揺り戻し」が起こっている。この「揺り戻し」を繰り返している内に、赤の他人を「見知る」。

すなわち、明確な形でやり取りをしているわけではなく、単純に他者に対する見方が変わったり他者のことを少しずつ知ったりするようになる（知った気になる）のである。カフェの中では、「見知る」という仕方で限りなく他者と自分とが接近していると言える。

しかし、このような周囲とのあり方は、街中のカフェにあっては、人々の入れ替わりが頻繁に起こり、いつも簡単に「リセット」される。

記述4：2010.11.18 18:06～20:14
スターバックス 天神西通り店
…私がここに来たときと比べると明らかに人が少ない。私も大分ここに長く居たなという感覚。…私はここに取り残され、他の人は次々出て行ったという印象も受ける。腰も痛いしそろそろ出るか。20:08、私の両隣に新たに客がやってくる。左隣の客の、まだ手をつけていない新しいコーヒーと新しいスコーン。右隣の女性は席につくと、堰を切ったように勢いよく早口で電話で話し始める。もうここは彼女たちの場所なのだ。もう私が居るべき場所ではない。ちょうどコーヒーも飲み終わった。私は店を出ようと思う。20:10、再び店内は賑わってきたが、一度店を出ようかなと思うと、その賑わいに私はとけ込むことができない。

「見知った」客から取り残され、新たにやって来た客で周囲が満たされると、そこは「場違い」になる。他者を「見知る」と、その場に「馴染む」ことが連動して起こっていると解釈できる。また、居なくなった客の存在と新たな客の存在が筆者を店の外へと追い出す一つのきっかけになっている。私たちは周囲の人々の居るといふことや居なくなるといふことに支えられてその場に居るのである。「リセット」される瞬間、他者の存在に自分のあり方を問われていると言える。

そして、周囲の人か自分のどちらか一方が居なくなるとき、容易く「見知った」人を「見失う」。どれほど「見知って」いようと、結局は赤の他人ということ思い知らされるのである。お互いは都市の人ごみに

紛れ、もはや「見知った」人には見えなくなり、単なる人ごみの一部でしかなくなる。カフェの中では明確な交流など起こらず、それどころか一度どちらかが店を出てしまえば、二度と同じ場所で隣り合うことはないのである。カフェの中ではこのようにして他者と遭遇し、他者を喪失している。

3-3. 「隣り合う」に含蓄されていること

前節で確認した通り、「揺り戻し」により他者はただの他者ではなくなっている。どちらかがそこに居る限りにおいては「見知った」者としてその場に居るのである。時間を重ねていくことでその人のことを知った気になるというのはどういうことだろうか。

記述5：2012.9.1 15時半～16時半
タリーズコーヒー キャナルシティ博多店
私の隣の親子は楽しそうに話している。父だけが浮いているような気がするが。父が娘を茶化すように言う、「お前はカレーのときもドリアのときも何でもぐちゃぐちゃにするよな」。話によると、その女の子はカレーもドリアも、そしてタリーズのかき氷でさえもかき混ぜて食べるらしい。ふたりの娘はおやつに必死になりたまに両親に向かってわーわーと叫んでいる。父親は相手にしてほしいとでも言うようにぐるとどこかでもらって来たひも付きの風船を指で回している。…子どもがかき氷にかぶりついている間、夫婦は大人の話をする。夫の仕事に関する話。そのときだけ少し声のトーンが変わる。母は妻へ、父は夫へなる。子どもはそんなこと気にもしていないのかもしれない、もしかしたら何となく聞いているのかもしれない。私はその家族の本来なら見ることのできない部分、知らないはずの部分垣間みた気がした。のぞき見てしまったような気がした。

記述6：2012.10.14 20時頃～21時頃
スターバックス メディアモール天神店
店員さんのこんばんはという声に顔を上げると何人かまとまってお客さんが入って来ていた。その内の制服を着た女子高生は例の自学している人達と同じ席を選んだ。…私が高校生のころはこんなことしていなかったなとスタバで勉強している高校生を見るといつもほとんど反射的に思ってしまう。…ひとり黙々と自学している人達は楽しそうに話をして人達に囲まれている私の目からは少し別の空気を持つ者として見えるが、その行為自体にはとても共感できる。私もスタバで同じように過ごすことがあるからだ。このようにして私たちは何気なくカフェに居る人を自分と重ねて自分がやっていることを振り返るのかもしれない。

「見知る」ということは、単なる知識として他者や街に関する情報を得ているという意味に留まらず、時に「共感する」「納得する」「悪い気がする」という仕方で、他者がありありと自身に迫ってくるという意味をも含んでいる。これは、明確な関係性を築くことなく、言外に他者にアクセスしていると言い換えることができるかもしれない。以上のような意味で、私たちはカフェの中で、「他者の生活を、街の営みを目撃している」と言える。

しかし、他者の存在というのは私たちの実感として残っているのだろうかと思問せざるを得ない。私たちは容易く他者を「見失う」のだった。結局、人々の姿というのは詳細に記録に残るが、それは見聞きできる範囲であって、ある人のある瞬間のふるまいや表情といったことは書いている隙からぼろぼろとこぼれ落ち

ていく。そして、どちらか一方がその場から姿を消すときには忘れ去られている(どうでもよくなっている)。頻りに周囲とのあり方が「リセット」される、次から次へと見聞きするものが変わっていくカフェの中にあつては、人々の姿や人々の生活というのもまた、自分の中を一時的に通過していくものでしかない。

すなわち、一節で述べた「見知らぬ人々がその場限りのこととして隣り合っている場」とは、他者の生活を目撃しているという瞬間がありながらも、同時にそのような瞬間が次々と切り捨てられる経験もしていることを含蓄している言葉である。

4. カフェハコ——サードプレイスに近い場所——

カフェハコは、筆者が大学の校舎内で運営するカフェである。この場を語るキーワードは「大学内」「常連客」「会話」である。すなわち、スタッフ同士、客とスタッフ、客同士は、「大学」という下地があるからこそ、共通した話題を持ちやすく、その場に根をはりやすい。

初めて出会った人同士でも、会話が生まれ顔見知りになる契機が準備されている。そして、一度知り合うと、全ては大学内で起こっているため、その関係性はその場限りのこととして収まらない。カフェハコでは、そのように隣り合っているからこそ、会話を中心とした関係性を築くことができるが、同時に、しがらみともなり、その場から抜け出しづらくもある。

ここで、非常に安直ではあるが、都市をオルデンバーグが言うように、家や職場などの特別な場所を除いて、ほとんどの場合が他者との関係が途切れている場であると言うとすれば、そのような背景において、サードプレイスは意義深い場所として浮かび上がってくる。しかし、それと同時に、カフェハコのように、他者との関係は時にしがらみにもなるのである。

つまり、都市の中でサードプレイスと対置したとき、街中のチェーン店のカフェの意味が見えてくる。論点は他者との距離感である。チェーン店のカフェでは、明確なコミュニケーションが起こらない間柄だからこそ、普段は出会うことのない他者の存在が目につき、彼らの生活を目撃していると感じるのだった。チェーン店のカフェは、しがらみのない中で他者を感じている、付かず離れずの他者とのあり方を許容する場であるという点で意味があると言えるだろう。

5. 総合考察

「見知らぬ他者と隣り合っている」ということに本研究の結論が全て詰まっている。「見知らぬ他者」であ

るからこそ、窮屈な思いをせずに、それでもある瞬間には他者と自分とを擦り寄せることができる。まずは、チェーン店のカフェがそのような人々のあり方を許容する場であるという点で、魅力的であると言える。言い換えると、「魅力的である」と言えることの根拠が、その場に居るといって自体に裏打ちされているのである。だからこそ、その場での筆者も含めた人々のあり方まるごとが、その場の様相を現すとと言える。ここで、再び鈴木という言葉借りるなら、「居方」が「豊かさ」を現すとと言えるのは、自分自身がまさにその場に居ることができるからではないかということである。

そして、「魅力的」や「豊か」と言えるということ自体がその場をよく現していると言えるのだが、そこで終わるのではなく、どのように「魅力的」「豊か」であるのかということ言葉をしていくことで、そのような「魅力」や「豊かさ」が与えられる場所がどのような意味を持つのかということに迫ることができる。

先行研究との関係づけをすると、今まで都市再生の手段という観点からしか語られてこなかったチェーン店のカフェを、サードプレイスなどの既存の概念に当てはめることなく、その中で起こっていることの魅力、そこに留まらない都市における意味という観点から語る事ができた。それは「その場に客として居る」という素朴な態度で臨んだからこそである。その場に居る中で何らかの問いが生まれたとき初めて、その場の意味を明らかにすることができるのである。

人々は、街中のカフェで、心もとないあり方で他者と隣り合わせている。しかし、それは悲観することではなく、そのようなあり方だからこそ、たったコーヒー1杯で未知の他者と隣り合うことができ、ある局面では、彼らと自分とを無言のうちに擦り寄せることができるのである。

6. 引用文献

- 井川勇・高田光雄・三浦研 2005 サードプレイスの概念からみたカフェ空間に関する考察 日本建築学会大会(近畿)学術講演梗概集, 515-516.
- Oldenburg, R. 1999 The great good place cafes, coffee shops, bookstores, bars, hair salons and other hangouts at the heart of a community. DC CAPO PRESS.
- 斉藤参郎・木口知之・梶井昌邦・中嶋貴昭 2008 消費者回遊行動からみた都心カフェの機能と経済効果 日本オペレーションズ・リサーチ学会秋季研究発表会, 218-219.
- 阪本英二 2008 場所を現象学すること-生きるという方法 サトウタツヤ・南博文(編)質的心理学講座3 社会と場所の経験 東京大学出版会 Pp. 185-207.
- 鈴木毅 1994 人の「居方」からみる環境 現代思想, 22, 13, 188-197.
- 谷川浩太郎・有馬隆文・大木健人 2008 多様化するカフェの特徴と都心におけるその役割 都市・建築学研究 九州大学大学院人間環境学研究院紀要 第13号, 11-17.